



## 多治見市文化財保護センター企画展

ね も と や き

# 根本焼

—晴れのうつわ—

平成22年1月18日(月)～6月25日(金)



### 1 はじめに

根本焼とは、多治見市根本地区において江戸時代後期～昭和30年(1955)頃に生産された磁器のことをいい、とくに明治～大正時代にかけて生産された、淡い青色の呉須を用い美しい絵付けが施された染付磁器がよく知られている。根本焼は、大正5年(1916)の『岐阜県産業史』によれば、春日井郡高蔵寺村(現愛知県春日井市)出身の小助(根本に移住後、坂崎姓を名乗る)が瀬戸で修行をした後、根本へ移住し、嘉永元年(1848)に製造を始めたとされるが、根本焼の窯の発掘調査例はなく、文献が残されていないため、初期の根本焼の実態は定かではない。最盛期には登り窯3基が作られ、上絵付用の錦窯も設置されたが、昭和初期には1基に縮小され、最後の窯も昭和30年(1955)頃には生産が終了した(多治見市1987)。最後まで生産が続けられた連房式登り窯は根本町11丁目に現存し、多治見市史跡に指定されている。

本展は、製品や文献、関係者への調査などから、江戸時代後期～昭和30年頃までの根本焼の生産について、紹介するものである。尚、本展は、多治見市文化財審議会委員・小木曾郁夫氏の調査研究によるところが大きいことを、申し添える。



図1 明治22年(1889)村制施行当時の多治見市周辺図  
(『多治見市史 通史編下』1987に加筆)



図2 根本焼下絵図帳 明治42年(1909)頃のページ 個人蔵

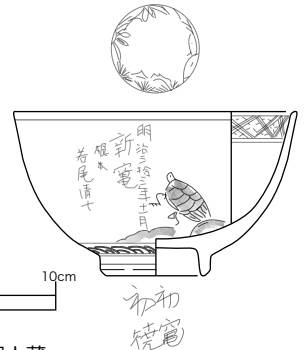


図3 染付亀松文飯茶碗 1900年 個人蔵

銘「明治三十三年十一月 新竈 根本 若尾清七」「初竈初焼」  
若尾清七は若尾清助の息子で、親子で史跡・根本連房式登り窯で焼成を行っていた。窯は明治初期に建てられ、1度改築されているという。この碗は、改築後の初窯で焼成されたものと思われる。

## 2 根本焼の始まり

嘉永元年（1848）に小助が開窯したとされる根本焼であるが、開始期の実態は明らかではない。歴史的背景をみると、嘉永年間的美濃は、19世紀初頭に瀬戸から技術が伝わった磁器生産が定着し、磁器の生産量が飛躍的に増大する時期である。当時、窯焚きは窯株を持つものにししか許されなかったが、私領にはなかなか規制が及ばず、窯株を持たない新窯（無株新窯）が根本村を含めた私領に作られ、磁器が生産されるようになってくる（多治見市 1976a）。文献上では、嘉永5年（1852）「御料・御私領・新窯 美濃窯株数惣調書」（『多治見市史 窯業史料編』53）に新規建立分の窯として「林内膳様知行所根本村 壱通り」との記載があり、小助開窯期に最も近い記録である。

小助は、<sup>かまさか</sup>窯坂古窯跡（根本町9丁目）で焼成を行い、小助の窯のすぐ西側にもう1基、弟子が明治時代初めに窯を開いている。また、明治10年（1877）頃に別の弟子・若尾清助が元昌寺裏（根本町11丁目）に新窯1基を開き、計3基になったとされる（多治見市 1987）。明治14年（1881）岐阜県記録課作成「可児郡各村略誌」（岐阜県図書館所蔵）の、根本村「陶器窯3カ所」の記載がこれを裏付ける。

**いわゆる「根本焼」生産の始まりは？** 淡い青色の染付と丁寧な成形が一般的にイメージされる「根本焼」の特徴であるが、このような製品が小助開窯当初から作られていたわけではない。小助は明治7年（1874）に没し、その後、息子の周助、助三郎に窯が引き継がれる（多治見市 1987）が、原料を厳選し、丁寧に仕上げたやや高級志向の製品を作り始めるのは、明治20年代になってからと考えられる。

窯坂古窯跡からは、江戸時代後期の炆器染付製品、高台裏に「慶応四年」（1868）と染付された磁器片、明治6～7年（1873～74）に普及した輸入コバルトの特徴を示す濃い青色の染付磁器片などが採集されており、小助開窯期から明治時代前半は、いわゆる「根本焼」生産には至っていないと推測できる。窯坂古窯跡からの採集品に、「明治二十年」（1887）銘の輸入コバルトで絵付けされた磁器丸碗がある（図5-1・7-1）。



図4 窯坂古窯跡（根本町9丁目）採集品

最も古い「根本焼」は、明治25年（1892）箱書のある蓋付飯茶碗である（図5-3・7-2）。このことから、「明治二十年」銘丸碗が根本の窯で焼成されたものであるとすれば、明治20年代前半に画期があるとみることができる。さらには、明治時代に内国勸業博覧会が5回開催されているが、第3回～第5回（明治23/28/36年（1890/1895/1903））に根本からの出品記録がみられ、明治14年（1881）開催の第2回には根本からの出品者は見られないため<sup>(1)</sup>、ここからも明治20年代になって出品に耐え得るような製品を作り始めたと推測できる。

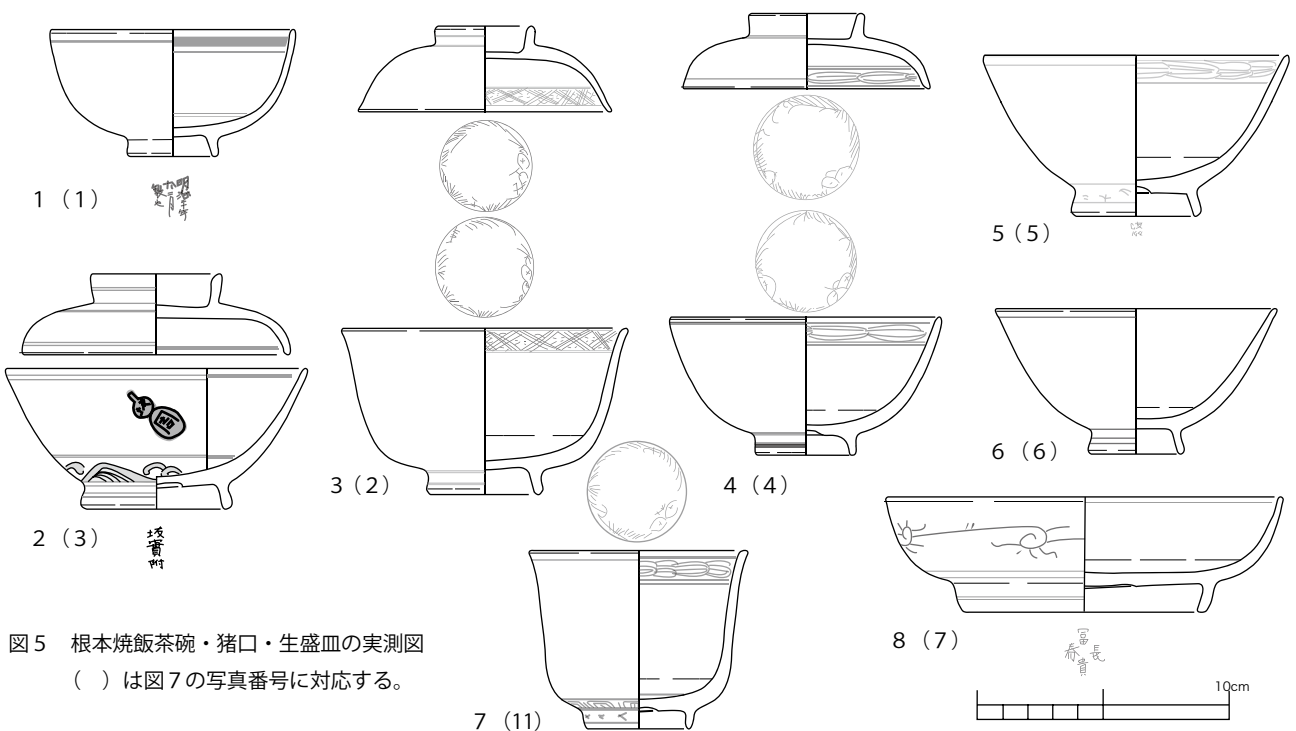


図5 根本焼飯茶碗・猪口・生盛皿の実測図  
（ ）は図7の写真番号に対応する。

### 3 根本焼はどのような器だったのか？

現在確認できる根本焼の器種構成は、蓋付飯茶碗（奈良茶碗）、蒸茶碗、生盛皿、猪口が大半を占め、それに少量

の湯飲茶碗、皿類などが伴うというものである。また、根本焼の職人の子孫が受け継ぐ根本焼下絵図帳（図2）<sup>(2)</sup>には、図案とともに表1のような器種名が記され、当時作られていた器種が推測できる。

根本焼の中心器種は、漆器の本膳揃いの器種と重なるものである。本膳の膳組みは室町時代中期に定まり、本来は漆器で揃えられるものであったが、江戸時代中期から磁器が取り入れられるようになってくる。本膳の組み合わせは時期や地域によって違いはあるが、一般的には、一の膳では飯、汁、壺（坪）、平の四碗に手塩皿を加えたものであり、壺は猪口に、平は膳皿（生盛皿）に置き換えられることもあるといい（神崎 1998）、これらに相当する器種が根本焼にみられる。また、本膳用の漆器と同様に10人前・20人前揃いで箱詰めされているものが多くみられること、松竹梅のようなおめでたい文様が多いことも、根本焼の特徴である。

「子どもの頃、根本茶碗は正月とお祭りのときにしか使わなかった。」という男性（昭和6年、多治見市大原町生まれ）の証言があるが、根本焼は日用食器ではなく、祝い事など特別な席で用いるための食器として作られたと考えられる。当時の国内向けの美濃焼が、機械化や絵付け技術の革新により大量生産化へ向かっていたのに対し、根本の生産者たちは、国内向にやや高級志向の製品をセット販売するという手法を選択したのだろう。



図6 本膳 漆器の膳組み例

表1 根本焼下絵図帳にみられる器種名  
明治44年～大正2年（1911～1913）

No.	下絵図帳での表記	推測される器種	
1	カント	身・蓋	蓋付広東碗
2	平丈	身・蓋	浅い碗？
3	ソリ	身・蓋	蓋付端反碗
4	大丸	身・蓋	蓋付丸碗（大）
5	丸	身・蓋	蓋付丸碗
6	中丸	身・蓋	蓋付丸碗（中）
7	小丸	身・蓋	蓋付丸碗（小）
8	ムシ	身・蓋	蒸茶碗
9	大ムシ	身・蓋	蒸茶碗
10	小ムシ	身・蓋	蒸茶碗
11	坪（ツボ）ムシ	身・蓋	蒸茶碗・筒形？
12	タガ	身・蓋	不明
13	桶むし	身・蓋	蒸茶碗
14	猪		猪口
15	生盛		生盛皿
16	中出シ		湯飲茶碗

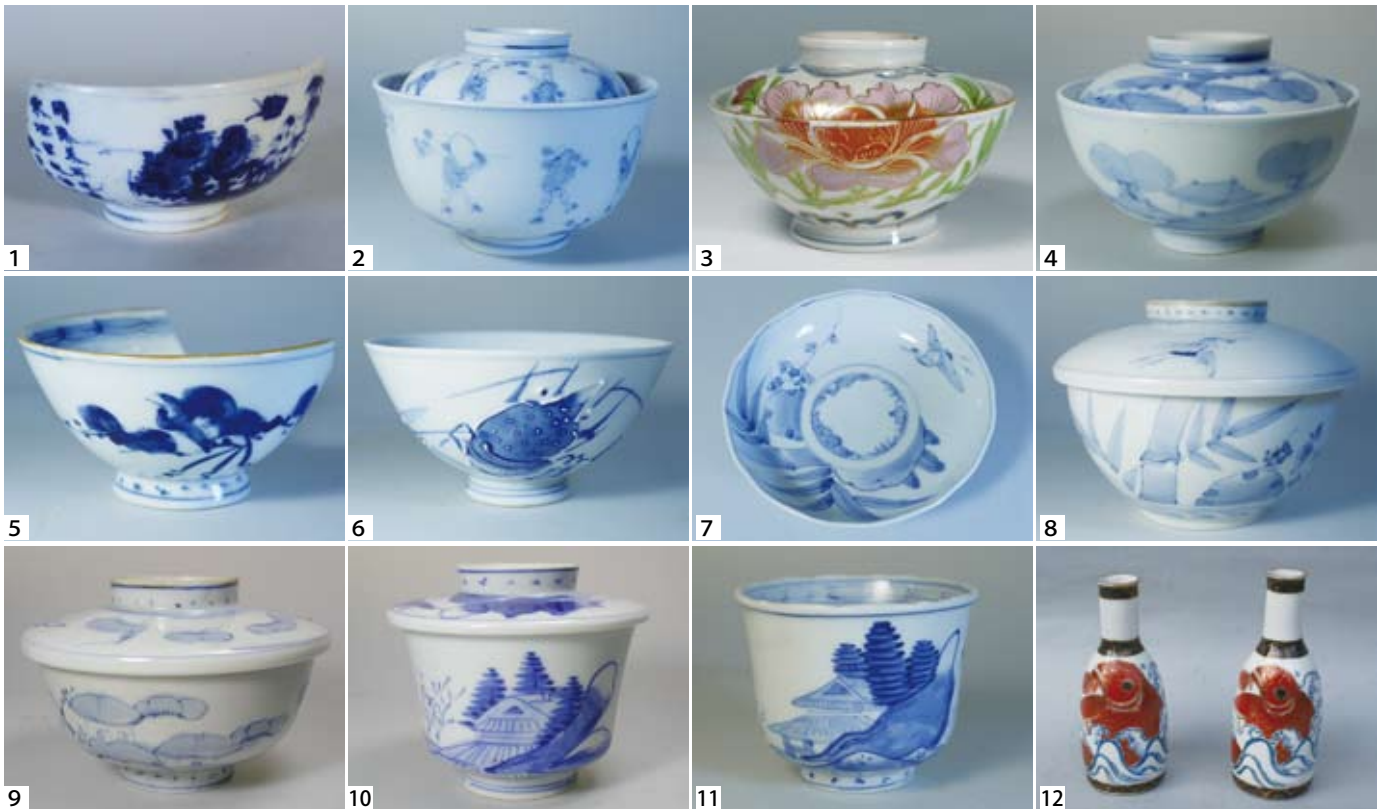


図7 1.「明治二十年」銘丸碗 1887年 窯坂古窯跡付近採集 2.唐子文蓋付飯茶碗（端反碗）明治25年（1892）箱書  
3.上絵牡丹文蓋付飯茶碗（広東碗）明治末～大正初め 4.山水文蓋付飯茶碗（丸碗）大正10年（1921）箱書 5.「岐144」裏印  
松鶴文飯茶碗 昭和18～20年（1943～45）頃 6.海老文飯茶碗 昭和20～30年（1945～55）頃 7.鶴松竹梅文生盛皿 明治  
32年（1832）箱書 8.鶴松竹梅文蒸茶碗 明治後半 9.山水文蒸茶碗 明治末～大正 10.山水文筒形蒸茶碗 明治末～大正  
11.山水文猪口 明治末～大正 12.上絵鯛文御神酒徳利「素吟山人」銘 大正頃 （3・8岐阜県陶磁資料館蔵 1・6・7・12個人蔵）

## 4 根本焼はどこへ流通した？

根本焼が詰められている箱には、購入者が自分の住所、氏名とともに「根本焼」「可児郡根本製」と墨書していることが多い。図7-2の茶碗の共箱には「可児郡根本製」と書かれ、購入者の住所は「串原村字中澤」（現恵那市串原中沢）と記される。また、図8は、大正元年（1912）の名古屋新聞（中日新聞の前身）が箱に貼られ、「根本焼 皿 ちよく」と書かれている（「根本」は「根本」の誤りであろう）。このような箱書から、根本焼が東濃地方とその周辺では、「美濃焼」ではなく「根本焼」というブランド名で流通していたことがわかる。

もう1点、文献から根本焼の流通が垣間見える資料がある。可児郡長瀬村（現多治見市豊岡町）で明治時代に陶器商を営んでいた家の文書「古田文雄家文書」（多治見市図書館郷土資料室蔵）に、根本との取引の記録が残されている。古田家はヤマ定という屋号で明治時代に陶器商を営んでおり、飛騨高山を取引先にしていて、明治34～35年（1901～02）の「金銭出入帳」には、坂崎周助、坂崎勝三郎という根本焼生産者の名前が頻りに登場し、取引があったことがわかる。ヤマ定の「荷物送記」には、長瀬村→今渡湊（現可児市）→（木曾川）→下川辺（現加茂郡川辺町）→下市場（現加茂郡七宗町）→金山（現下呂市金山町）→飛騨高山という荷の輸送ルートが記され、このルートで根本焼が高山まで運ばれたものと考えられる。



図8  
上絵鶴松竹梅文  
生盛皿・猪口（明  
治末～大正初め）  
と共箱

岐阜県陶磁資料  
館蔵

## 5 最後の根本焼



図9 多治見市史跡 根本連房式登り窯

根本焼は、明治時代後半から大正時代にかけて最盛期を迎え、美濃地方の他の地区に比べれば小規模な生産であったにもかかわらず、「根本焼」というブランドで流通していたとみられる。しかし、最盛期には3基あった登り窯が、大正10年（1921）代には窯2基、製造戸数は3戸、昭和6年（1931）には窯1基、製造戸数1戸<sup>(3)</sup>となるように、昭和時代に入ると生産量が減少していく。昭和18年（1943）、戦時統制による企業整備が行われ、1戸のみの根本焼生産者 若尾角三郎は（有）東部窯業に整備統合され、「岐144」の統制番号入りの製品を生産した（小木曾2010、岐阜県陶磁器工業協同組合連合会1982）。戦後もしばらく、現存する根本連房式登り窯で生産が続けられたが、昭和30年（1955）頃に根本焼の生産は終了した。  
（春日美海）

注（1）立花昭（1996）作成の資料を参照した。

（2）資料の存在は、小木曾郁夫氏にお教えいただいた。

（3）「多治見市誌稿」参照。多治見市図書館郷土資料室所蔵、1953年頃、多治見市史編纂の準備として作成された資料である。

〈参考文献〉

- 小木曾郁夫 2010「一美濃の近代陶磁—根本焼の展開」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第10号 多治見市教育委員会（3月刊行）  
 神崎宣武 1996『うつわを食らう 日本人と食事の文化』日本放送出版協会  
 神崎宣武 1996『図説 日本のうつわ—食事の文化を探る』河出書房新社  
 岐阜県 1916『岐阜県産業史』（岐阜県郷土資料研究協議会 再版 1995）  
 岐阜県陶磁器工業協同組合連合会 1982『美濃陶業五拾年史』  
 多治見市 1976a『多治見市史 通史編上』  
 多治見市 1976b『多治見市史 窯業史料編』  
 多治見市 1987『多治見市史 通史編下』  
 立花 昭 1996「内国勲業博覧会と岐阜県の窯業」『多治見市文化財保護センター研究紀要』第2号 多治見市教育委員会

〈謝辞〉本展開催にあたり、ご協力いただきました方々に厚く御礼申し上げます。

協力機関（個人の協力者名は省略）

岐阜県陶磁資料館、多治見市図書館郷土資料室

多治見市文化財保護センター企画展  
「根本焼 —晴れのうつわ—」

展示期間：平成22年1月18日（月）～6月25日（金）  
開館時間：午前9時～午後5時 休館日：土・日・祝日 入場無料

発行 多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘10-6-26

電話 (0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL <http://www.city.tajimi.gifu.jp/bunkazai/>